

JOMF 派遣医師便り (2014. 1)

◆マニラ◆

「暗闇のタクロバン」と「光の中のタクロバン」

マニラ日本人会診療所

菊地宏久

2013年12月30日から1月3日にかけてレイテ島の Tacloban に行き医療援助活動を行いました。巨大台風 Yolanda を境に人々の社会生活が激変しました。電気は未だ復旧されず夜は真っ暗な闇が広がっていました。公衆衛生的にも劣悪化し、環境変化や薬剤調達不可能なため持病の悪化、新たな疾患の発生、感染症の蔓延など医療面でも深刻化しています。緊急治療を必要としている方々への早急な対応が必要です。医療環境の改善には薬や医療機器の配備も重要ですが、電気や食料環境の改善、衛生的な水の補給など生命を支える最低限のインフラ整備が急務です。

被災直後はセブ島からレイテ島に入り Ormoc の病院やセブ島最北端部被災地区で医療援助活動を行いました。今回、昨年末から Tacloban 市内の公立病院に行き妻と共に活動をしてきましたので報告いたします。

病院の建物や検査室も甚大な被害を受け、検査器具や患者さんの大切なデータも豪風と波に奪われ診断や治療に大きな支障をきたしていました。病院は自家発電によりどうにか運営されていましたが安定した電気の供給もなく精密機器の使用は不可能でした。医療機器も破壊され微量点滴機器さえも使用できず、ショック状態や重篤患者の生命維持管理ができない状況でした。ほとんどの病院スタッフ、そしてその家族が被災しているためスタッフ数も減少していました。そのような中でもスタッフの皆さんは昼夜も明るく働いていました。しかしながら感染症蔓延、患者さんの持病の悪化、薬剤や検査器具不足などの中長期展望については悲観的な様子でした。

私は循環器科病棟と ICU 病棟の患者さんを中心に対応し、妻は患者さんと御家族の方々の心のケアをサポートさせていただきました。また持参した食料品などをお渡しいたしました。

病院の放射線機器や超音波機器は破壊され使えない状態で、ICU でさえ有効検査機器は心電図しかありませんでした。循環器科病棟には心筋梗塞や脳血管疾患の患者さんがおられましたが、高度治療はもちろん困難で対症療法がなされていました。

ICU に入ると、極めて重篤な心臓弁膜症の若い女性が入院していました。「あなた方が病室に入ってきたとき、助けてくれるのではないかと思います。私が生きることのできる唯一の治療法は手術しかないと言われています、助けてください」と息苦しそうに話されました。Yolanda による被災以前は内服薬で病態が安定していましたが、台風災害のため生活環境が一変し、薬も買えず心不全病態が急激に悪化してしまいました。起坐

呼吸（臥位になると呼吸が苦しくなる、重症心不全の徴候の一つ）の状態でしたが酸素吸入も十分には受けられない状況でした。ずっと上半身を上げていて横になれないため背中の強い痛みも訴えておられました。病態の悪化や生活面での困難さからご主人とも別れてしまったそうです。台風は人々の家庭環境にも健康にも取り返しのつかない被害を及ぼしてしまっていました。生活苦や医療費の問題、精神的トラウマなどの苦悩を、涙ぐみながら何度も私の妻に訴えていました。患者さんの細い手を握りながら“何とかしてあげたい”と思いました。

また、ある男性は脳出血を起こし完全麻痺・意識障害に至り入院したばかりでした。意識は無く体動もほとんどありません。マットレスがない金属板の固いベッドの上にじかに横たわっていました。持病で高血圧がありましたが Yolanda 後は降圧剤が買えず血圧変動がさらに悪化し脳出血を起こしてしまいました。栄養剤の点滴投与で対応することしかできない状況でした。

外来においては肺結核の患者さんも非常に多くおられました。Yolanda を境目に抗結核薬の調達ができなくなってしまい呼吸器症状が再び悪化してしまった患者さんもたくさんおられました。この病院では抗結核薬を無料で病院薬局から処方していましたが、病院まで受診できない（たどり着けない）患者さんも多くおられます。「肺結核の患者さんが多いのでは？」と聞くと、病院の医師は「結核患者さんはそこにもここにも、周囲にたくさんおられますよ」と言っていました。肺結核のさらなる蔓延が危惧される状況だと感じました。

Tacloban 在住で被災したご家族の家に夕方招かれる機会がありました。電気が復旧していないのでロウソクで夜を過ごしていました。祖母さんが、台風 Yolanda が来た時のことを話してくれました。「暴風雨が怒涛の勢いで家をたたき、壁を揺さぶって、“どどどど”という恐ろしい音で震えていた。そして、一挙に豪雨が家の中に押し寄せ、家の1階は水で埋め尽くされ2階まで水位は上がってきた。2階までどうにか逃げ上がったが水が引くまでの時間は死に物狂いの状態で、家族でなんとか生き延びた」と話されていました。そして「水が引いた後には膨れ上がった遺体が道のあちこちに散乱し、三週間はそのまま放置され、腐敗臭があたり一面漂っていた」とも言われました。

また、「三週間は食料の配給も無く、みんな飢餓と恐怖の苦しみから発狂寸前の状態だった。今でもお嫁さんは今回のことを思い出すだけで、恐ろしさで体が震え上がり、孫たちは雨が強く降るだけで怯えて泣き出すようになった」とも話しておられました。

お嫁さんは被災直後の様子を、「道をすれ違う人々はみな幽霊のような様相で顔をうな垂れ、家族を探して歩いている人たちは無表情で、人々とすれ違ってみな魂を抜かれたような状態で言葉を交わすこともなかった」と人間の極限状態の話がされていました。

その家族と共に Tacloban の夜を車で走りました。真っ暗な闇夜の町を想像できますか。ほんの少しの裸電球の光が、ぼつぼつとあるだけで本当に真っ暗な夜です。家々の中も真っ暗です。治安面からも危惧されます。「病院の女性看護師が Hold up されました。Tacloban の治安はそういう状況です」と病院で医師が深刻な面持ちで話していたのを思い出しまし

た。

レイテ島 Tacloban での医療援助活動についてお伝えいたしました。台風 30 号 Yolanda を境に人々の社会生活が激変しました。公衆衛生的にも劣悪化し、環境変化や薬剤調達不可能なため持病の悪化、新たな疾患の発生、感染症の蔓延、精神的トラウマなど医療面でも至急解決すべき問題が山積みされています。薬や医療機器の配備も必要ですが、衛生的な飲料水の供給、電気や食料環境の改善、そして心の通った精神的なサポートが必要です。

Tacloban の夜はまだ真っ暗闇です。人々は恐ろしいほど静かすぎる夜をろうソクの灯りだけで過ごしています。

Tacloban の町が“光のある町”に戻っていかねばならないと思っています。

ご家族を失くされた方々、被災された方々ができるだけ早く本当の笑顔になることができるよう、被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。

(2014 年 1 月 6 日記)